

日
汉
对
照

日本风情丛书

日本

邱 岭 编著
胡令远

文学艺术集粹

東方出版中心



日
汉
对
照

日本风情丛书

日本

邱 岭 编著
胡令远

文学艺术集粹

东方出版中心

目 (CIP) 数据

艺术集粹/邱岭, 胡令远编著. —上海:
东方出版中心, 2001. 2

(日汉对照日本风情丛书)

ISBN 7-80627-663-7

I. 日... II. ①邱...②胡... III. 日语-对照读物,
文学-日、汉 IV. H369.4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2001) 第 00338 号

日本文学艺术集粹

出版发行: 东方出版中心

地址: 上海市仙霞路 335 号

电话: 62417400

邮政编码: 200336

经销: 新华书店上海发行所

印刷: 昆山亭林印刷厂

开本: 787×960 毫米 1/32

字数: 186 千

印张: 10 插页: 2

印数: 1-5,000

版次: 2001 年 2 月第 1 版第 1 次印刷

ISBN 7-80627-663-7/H·71

定价: 11.00 元

版权所有, 侵权必究。

内 容 提 要

本书是《日本风情丛书》中的一种,采用日汉对照的形式,对日本的文学艺术作了较为全面的介绍,既涵盖了日本知名作家如松尾芭蕉、森鸥外、岛崎藤村、夏目漱石、芥川龙之介、葛西善藏、川端康成、三岛由纪夫、司马辽太郎、大江健三郎等,和产生重要影响的文学名著如《古事记》、《古今和歌集》、《源氏物语》、《徒然草》、《太平记》、《世间胸算用》及《失乐园》等,又对日本的能乐、偶人净琉璃、歌舞伎、水墨画、书法、电影、音乐等作了概要的叙述。本书可读性强,基本反映了日本文学艺术的概貌,既可供学习日语之用,又可作为了解日本文学艺术的理想读物。

日汉对照·日本风情丛书

《日本国民生活透视》

《日本社会纵览》

《日本风光掠影》

《日本历史回眸》

《日本文学艺术集粹》

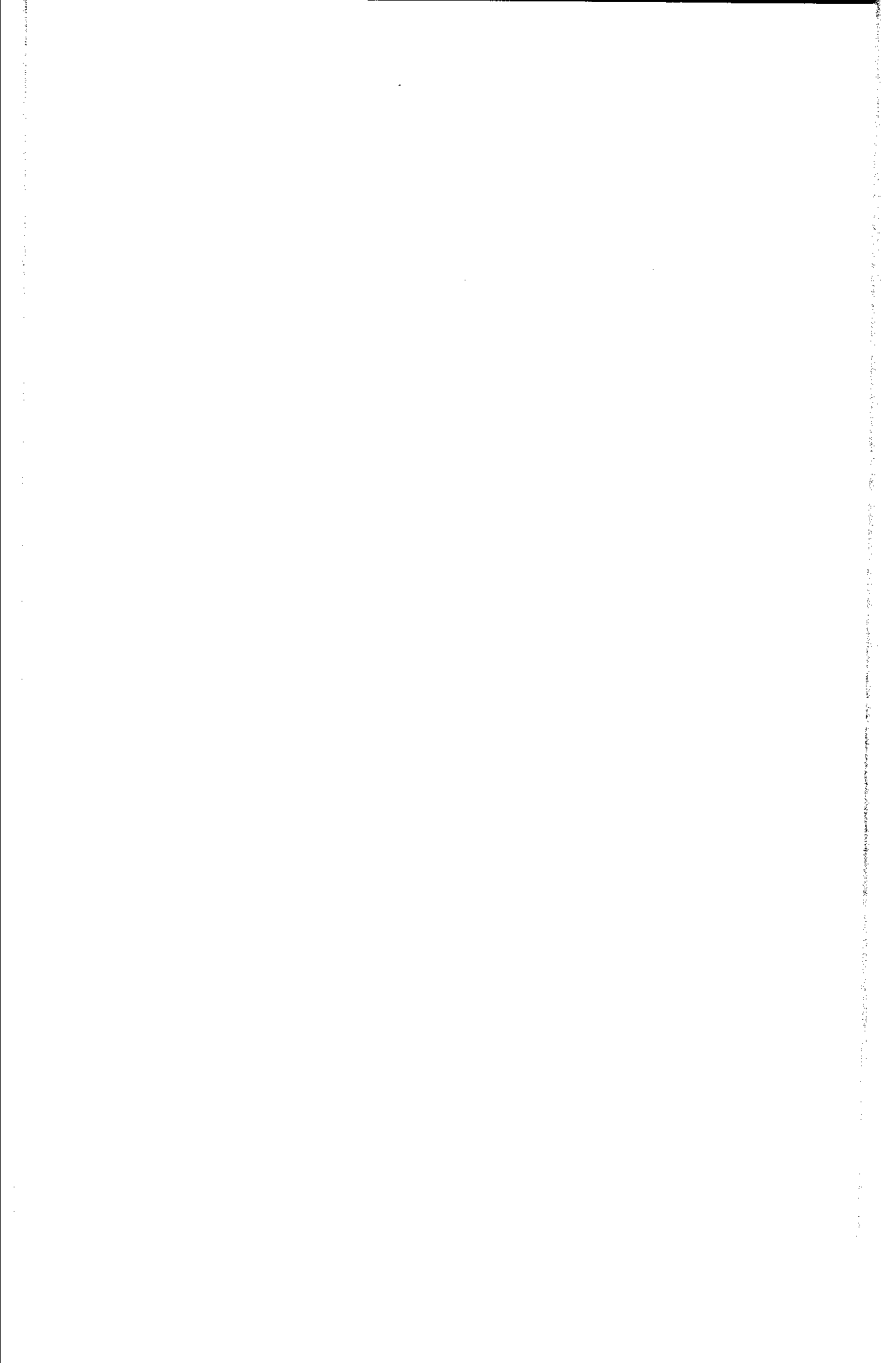
目 録 (目 录)

1. 天皇家の系譜——『古事記』……………	3
天皇家谱——《古事记》……………	181
2. 繊細で典雅な美的世界——『古今和歌 集』……………	10
細膩典雅的美学世界——《古今和歌 集》……………	186
3. 平安文学の最高傑作——『源氏物語』……	17
平安文学的最高杰作——《源氏物语》……	192
4. 自由に読める『徒然草』……………	23
涵容万象的《徒然草》……………	196
5. 日本の『三国演義』——『太平記』……………	29
日本的《三国演义》——《太平记》……………	201
6. 町人の大晦日悲喜劇——『世間胸算用』…	34
庶民除夕悲喜剧——《世间胸算用》……………	205
7. 漂泊詩人、求道の旅——『奥の細道』……………	40
漂泊诗人的求道之旅——《奥州小道》……………	209
8. 森林太郎トシテ死セントス——森鷗外 …	46
愿死而为森林太郎——森鷗外……………	214
9. 夜深く、月南軒を徘徊す——藤村印象……	52
夜深南轩月徘徊——藤村印象……………	218
10. 吾輩は千円札である——夏目漱石 ………	58
吾輩千元钞是也——夏目漱石……………	222

11. 大正時代文学の肖像画——芥川竜之介 …	64
大正时代文学的肖像画——芥川龙 之介 ……………	226
12. 子どもづれの哀しき父——葛西善蔵 ……	70
带孩子悲哀父亲——葛西善蔵 ……………	230
13. 日本美への讃美——川端康成 ……………	76
对日本美的赞美——川端康成 ……………	234
14. 廃墟に薔薇を植えた人——三島由紀夫 …	83
于废墟上栽薔薇者——三岛由纪夫 ………	239
15. 私的歴史文学者——司馬遼太郎 ……………	89
私家历史文学者——司马辽太郎 ……………	244
16. あいまいな日本の大江健三郎 ……………	95
暧昧日本的大江健三郎 ……………	249
17. 『失樂園』——愛はめんどうだなあ ……	101
《失乐园》——爱真麻烦 ……………	254
18. 水墨画聖雪舟等楊 ……………	107
水墨画圣雪舟等杨 ……………	258
19. 江戸民衆の浮世絵 ……………	113
江戸大众的浮世绘 ……………	262
20. 中世武家の演劇芸術——能楽 ……………	119
中世武家的演剧艺术——能乐 ……………	267
21. 近世平民の演劇芸術 I ——人形浄 瑠璃 ……………	125
近世平民的演剧艺术 I ——偶人浄 琉璃 ……………	271
22. 近世平民の演劇芸術 II ——歌舞伎 ……	131
近世平民的演剧艺术 II ——歌舞伎 ……	276

23. 盲名僧と唐招提寺	137
盲高僧与唐招提寺	281
24. 金のある金閣と銀のない銀閣	143
有金的金阁与无银的银阁	286
25. 庭園での水墨画——枯山水	149
庭园水墨画——枯山水	291
26. 書道の三筆と三蹟	155
书法的三笔与三迹	295
27. 日本映画百年の歩み	161
日本电影百年历程	300
28. 日本人の音楽生活	167
日本人的音乐生活	305
29. 21 世紀への提言	173
对 21 世纪的建议	309

日 语 原 文



1. 天皇家の系譜——『古事記』

ごく幼い子供は毎日楽しく遊ぶのに熱中していて、自分には両親や兄弟姉妹がおり、家庭のなかで育てられているのだというようなことを特別に考えはしないだろうが、やや成長すると、自分はどのように育ってきたのだろうか、両親はどんな人で、どうしてめぐりあい、そして自分が生まれたのだろうかといった問題を考えはじめるであろう。

一つの国の場合も同じで、国が誕生してまもなくの間は、建設に急がしくて、その成り立ちなどを書き残すゆとりはないが、国家の建設も一段落すると、それまでの国の歩みを振り返ろうという動きが出てくるのだと思われる。こうして、その国の歴史が記されることになる。

『古事記』は、そのような要求にうながされて書かれた、日本の古い歴史を記した書物である。だが、それには、葦原中国(日本の国の神話的名称)に、天照大神の血を受け継ぐ天皇家の祖先ニニギが正統なる統治者として高天原から天降って来るという図式は、驚くほど明解で整然としているので、『古事記』を読む上で大切なのは、それが天皇治政の正統性の由来とその発展史というテーマに貫かれた有機的構造体だという視点を確保すること

である。

『古事記』は天武天皇の時代に、古い伝承を舍人の稗田阿礼に暗唱させるというかたちで計画され、元明天皇の和銅五(712)年一月、太安万侶がこれを漢字によって三巻の書物に書き表わすことによって完成した。それは、日本の国を二つに分けるような壬申の乱も片づいて、さまざまな制度などを整えていこうとする時期にあたっていた。

歴史を記した書物といったが、今日考えられている歴史そのものではなく、神話・伝説を多くふくんだ、きわめて物語的な内容のものである。まず、日本の国というより、この世界の始まりはこんな具合に語られている。

「宇宙の初め、混沌としたものの中から天と地が初めて分かれた時、高い天上の聖なる世界、高天原に成り出でた神の名は、天地を主宰する天之御中主神、次に万物を生成する靈力をもった高御産巢日神、次に同じ靈力をもった神産巢日神である。この三柱の造化神は、みな配偶をもたない単独の神としてお成りになって、お姿を見せることはなかった。」

この天地創造の神話に始まり、推古天皇の代までのことを記している。上巻では、伊邪那岐命、伊邪那美命の国生み神話、天照大神と須佐之男命の姉弟の神の対決、大国主神や少名毘古那神の国作りの話、海幸彦と山幸彦の兄弟の話などの神話が語られる。中巻は神武天皇に始まって応神天皇ま

で、下巻は仁徳天皇から推古天皇にいたるが、歴史的にほぼ確かな事柄は、下巻の継体天皇あたりからであろう。しかし、物語としては、神武、垂仁、景行、応神、仁徳、允恭、安康、雄略などの天皇の代のこととして語られている事件に古代人の行動の仕方やものの考え方があざやかに写しだされている。

『古事記』の英雄は、なんといっても景行天皇の皇子の倭建命であるが、それが実在の人物でないことは、いうまでもない。「倭建」という名は、大和朝廷の勇者という普通名詞であり、倭建命の物語は、大和の勇者の数数の物語が、長い年月を経るうちに一人の英雄に形象化されたものであろう。また、倭建命の英雄的な、悲劇的な物語の裏には、倭比売から給わった草那芸剣という神剣の靈異が全体を貫いていることも見のがしてはいけなと思う。武力の象徴である剣が、武力そのものとしてではなく、それを通じて皇祖神の靈威が働きかけることによってはじめて征定が進められるというところにも、この物語の本質が秘められている。倭建と倭比売という二人の倭の男女の組合せも、倭建命という人物の素性が抽象的なものであることを示している。国土統一の英雄として語られた倭建命の物語は、次のような内容である。

景行天皇は、兄比売・弟比売という二人の乙女が、その容姿が美しいと聞き確かめて、御子の大碓命を遣わして宮廷に召した。ところが大碓命は宮

廷に召し上げずに、そのまま自分自身でその二人の乙女に求婚して、さらに別の女を捜し求め、偽って天皇の所望する乙女といって献上した。しかし天皇は献上されたのが別の女であることに気づいた。

ある日、天皇は小碓命に向かい、「どうしたことか汝の兄は朝夕の大御食に姿を見せない。汝が行って兄を教えさとせ」と命じた。しかし、それから五日たっても兄は姿を見せなかった。天皇は不審に思い問いただすと、小碓命は「朝はやく厠に入るところを待ち捕えて搥み批ぎ、手足をもぎとって、薦に包んで投げ棄ててしまいました」と答えた。

天皇は、小碓命の健く荒きことを買って、西の方の熊襲の征定を命じた。命は、姨の倭比売の御衣・御裳を給わり、剣を懐に入れて任地に向かった。熊襲の家では、御室楽が行なわれていた。そこで命は女装してやすやすとその中にたち交り、宴たけなわのとき、にわかに立って兄の熊襲建を刺し、弟も組み伏せてしまった。弟は命の勇武に驚き、「西の方に吾二人を除きて健く強き人なし。しかるに大和の国には吾二人にまさりて健き男は坐しけり」と言って倭建命の名をたてまつったが、命は熟した瓜を裂くようにその体を小気味よく引き裂いて殺した。こうしたわけで、その時から名前をほめたたえて倭建命というのである。

倭建命は帰路、山の神、河の神をみな平定し、出雲の国の出雲建も滅ぼして大和の都に帰還した

が、父の天皇はその勇武を恐れてか、ふたたび東方十二道の荒ぶる神やまつろわぬ人どもの征定を命じた。命は伊勢の大御神宮に立ち寄り、倭比売命に別れを告げ、比売から草那芸剣と御囊をたまわり、尾張では国造の祖、美夜受比売を訪れ還り上るときには婚をすることを誓って東国に下っていった。

倭建命は、相武の国の焼津で、その地の国造にあざむかれ、野火に攻めたてられたが、草那芸剣を抜いて草を切りはらい、その難を逃れた。さらに道を東にとって走水の海を渡ったが、暴風雨に見舞われ、危うく命を落とすところであった。しかし委の弟橘比売が身を海中に投じて海神の怒りを和らげた。命はこうして「荒ぶる蝦夷」どもを征定し、「山河の荒ぶる神ども」を平和し、相武の足柄・甲斐・科野を経て、尾張に入った。ここで命は美夜受比売との契りを果たしたが、草那芸剣をそこに置いて旅立った。このころには命の体はいたくおとろえ、ついに能煩野でそのはかない生涯を閉じ、その魂は美しい白鳥となって天にのぼっていった。

倭建命の物語、特に古事記におけるその文学的な表現は、波瀾にみちた戦闘の時代における、いかにも古代的な英雄の物語という印象を与える。しかし、「ホメロス以来の英雄」の世界を具現しているのは、物語の前半における倭建命や熊襲建で、後半の東国平定の物語での倭建命は、熊襲征定とは異なった人間像をもっている。今度は天皇に敬遠

されて東国に赴くのであり、命は「軍衆を賜わずして」出発した。また命の東国での活動は、美夜受比売との恋の物語、相武での野火の難、走水での弟橘比売の入水など、東征の名にふさわしいものは一つもない。大和に帰還する命の姿は、征討を終えて帰る英雄の華華しさはなく、都を指呼の間に望みながら病いに倒れ、その魂は美しい白鳥となって天にのぼっていくのである。この物語における命の像は、叙事詩的英雄に固有な集団の運命の体现者ではなくて、恋や冒険を求める孤独な英雄であり、物語を支えるものは、時時刻刻に変化する四囲の状態との対決ではなくて、集団や社会から切り離された人間の、主観的な、主情的な、あるいは浪漫的な心情である。東国の倭建命は浪漫的英雄と規定されるべきである。

現在残っている『古事記』の古写本はすべて漢字で記されている。最初の序文は漢文だが、本文は当時の日本語をできるだけ忠実に写そうというねらいで、さまざまな工夫がなされている。たとえば、「倭は国のまほろば」という倭建命の歌は、

夜麻登波 久爾能麻本呂婆

というように、一字一音で、漢字がのちの仮名のうに用いられている。そこからも安万侶たちの苦心が見える。

昭和五十四年一月二十日に奈良の茶畑の中から、偶然この安万侶の墓誌というものが発見された。彼の子孫は多氏を名のり、現在も伝統芸能の

雅楽に携わっている。『古事記』が書き上げられてからざっと千三百年近くの時間は、切れることなく続いているのである。